九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フェヌロンの女性觀

城野, 節子

https://doi.org/10.15017/2332980

出版情報：文學研究. 37, pp.134-136, 1948-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

雜錄

フェヌロンの女性觀

十七世紀フランスに發生したサロン生活が、一つの精神生活の態度として生み出したプレシオジテが當時の上流社會を風靡し、それにかぶれたいはゆるプレシウズたちが、モリエールの喜劇の好題材となつてゐる事は周知の事實である。モリエールは、プレシウズ・リディキュル（わらふべきえせ才女）、ファムサヴァント（女學者）、エコール・デ・ファム（女大學）などの作品に於てそれを嘲笑し諷刺した。

『……いつたい女の分際でお前のやうに澤山な事を研究したり知らうとしたりするのは、どこからどうみても穩かじやない。ずぼらなまねをしないやうに、子供のしつけもすれば世帶のきりもりもする。奉公人の監督もすれば入費がかさまないように注意もする。それが當然女の勉强なんだ、學問なんだ。……女といふものは上衣とズボンの見さかひがつくくらいに頭ができてゐれば何不足もないといつたものだからな。……昔の女どもは書物こそよまなかつたが、それでゐて立派にその日その日を送つて行つたものだ。學問といつたら世帶の話がうまくやつてのけられる事だつた。せつせと娘の嫁入りの支度をする指ぬきや、糸や縫針が昔の女たちの書物だつたのだ。ところが今の女連中ときたら、それとは全く反對な振舞をしてゐる。文章をかいて作家になる事が今の女の欲望だ。……』（女學者二幕七場内藤濯氏譯）

『男子は無法にも私どもを一段下の人間だとみなして、屑にもならない事ばかりに私どもの才能を働かさうとしてゐるではありませんか。高尚な學問の光りなど戸を閉してみせようとも致さないではございませんか、……』（女學者三幕二場内藤濯氏譯）

宮廷に出入しサロンに會合し、或はモリエールの周圍をとりまいたであらう女たちが、モリエールの才に負けまいとするしのぎをけづるエスプリの應酬が彼の作品の處々に散見される。勿論モリエールの主張には眞物のプレシウズは認めるがわらふべき才媛は困る。最もすぐれた物事も下劣な猿共によつて眞似られるところに、いひかへれば醜惡なる模倣に、喜劇の要素があるとする。さうした人達の心を、外面から或は内面にまで頭をつつこんで吟味し、分析し綜合して、それを諷刺にまでもつて行くモリエールには、どこまでも男性對女性といふはつきりした對象としての態度がみられる。對象といつても對等ではない。人間としての女性といふより、男性のための女性とみる意識がモリエールの心底からは決して拂拭されてはゐない。といつてそれは斷じて奴隷視ではないであらう。不自然と虚飾をきらつた素直な、陽氣な純粹さが聰明な教養によつてつつまれ

て、最も自然な人間のあるべき姿をこそモリエールは祈り願つたのであらう。

これに反しフェヌロンはどうであらう。モリエールに比するにあまりに突飛であるかもしれない。彼はカンブレの大司教である。かつてはコンフェツスール（懺悔聽聞僧）として多くの女性の懺悔をきいたであらう聖職である。彼は當時の崩れ行く王朝時代の間隙の中から、新しく芽生えんとする次の世紀の息吹きを感じ、その波にもまれて流されようとする多くの女性の群に溫情ゆたかなまなざしを向けた。彼の耳には聖堂の奥深くひざまづいて懺悔した若き女性の内奥の叫びが、再びよみがへつてくる。彼は女性の味方であつた。眞正面から女性の苦惱を、女性のありのままの姿を知る事ができた。

一六八七年にかいた「女子教育論」は當時の腐敗しつつあつた修道院教育に反省を促し、無關心のまま放置されてゐた女子教育の問題に世の注意を喚起するに充分な價値があつた。或はマダム・マントノンが、或はラ・ブリュイエールが、一應はとりあげてゐる問題を集大成し、且つ彼自身聖職者であつたといふことが、彼の說くところを一層特異ならしめてゐるといへる。特異とはいつても決して新奇ではない。

モリエールが皮肉と笑ひの好餌としたものを散文にし、しかも平易に、時には詳細な具体例をあげて說明したにすぎないともいへる。彼を訪れる女性は武裝しない。はじめから赤裸である。嬌態も虛飾もない。彼もまた眞實を以て應じた事であらう。モリエールとその周圍の女性とがかもし出す雰圍氣との相違が、そのまゝフェヌロンの女性觀を爲したとはいへないであらうか。鋭利な刀で解剖せずとも、フェヌロンは居ながらに女性の本音をきく事ができる。フェヌロンには喜劇は必要なしである。モリエールが、『女學者』の中でプレシウズの典型であるベリィズに、兄のクリザァルが言ふ言葉（前に引用した）は、フェヌロンにとつては自らを斬られる思ひであらう。モリエールの問に對する女性擁護者としての答へを、女性に代つて述べてゐるフェヌロンの溫情を彼の言葉からくみとらずにはゐられない。

『……娘たちは學問によつて賢くなる必要はない。好學心は彼女らを傲慢にし才媛ぶつた女にするだけであるから、ただ家政を整へる事ができ、夫にひたすら從順に仕へるだけで充分だと世人はいふが……。』

『……事實、わらふべき女學者をつくる事は充分に警戒しなければならぬ……』

『……彼女たちが弱ければ弱いだけ强くする事が必要である。彼女たちは果すべき義務を、人生の基礎である義務をもたないであらうか。實に一家を破壞するのも維持するのも彼女たちであり、その結果人類に最も深い關係ある事を決定するのも彼女達ではないか……。世界は幻影ではない。それは全家族の結合体である。いつたい誰がこれら全家族を女性よりもより以上の確實さを以て醇化する事ができようか。…』

（以上、女子教育論第一章）

女性を完全な一個の人格とみてそれに應じた學問教養の必要をといてゐるがこの論據は、宗教家にはまれな廣い視野と、冷靜な判斷からくる一般人間像に對する徹底した考察の結果であらう。彼は女性の短所欠点をすべて知りつくしてゐる。優柔と臆病、處飾と嫉妬、世辭追從、もろい友情、過度の感情、安價な感傷、非科學性、經濟觀念の皆無など非は非としてとりあげ、それをよき方向にむけるための方法論の中に、フェヌロンの寛大ではあるが嚴格な道德論が展開する。すべてはその上での女性へのねがひであり、要望である。

『……退屈な時には退屈だといへる自由さが彼女にあつてほしい。』（女子教育論九章）

『……男性を權力と名譽に導く同じ道が彼女たちには閉されてゐるので彼女たちは才智と身体を飾る事によつてうめあはせようとつとめる。……』（女子教育論十章）

『精神の虛榮と輕薄とが常に著しい流行の變遷をまねくものである事を彼女らに知らしめねばならない。……流行には氣まぐれがあるのみである。最も輕兆浮薄な教養のない人間が常に流行を誘導してゐる事になる。……』（女子教育論十章）

――最近讀んだものの中から

（城野節子研究生）